

①教科書p112～121『植生と遷移』を精読し、P122～123の「学習のまとめ」の単元末問題に解答する。空欄には鉛筆で記入する。

②自宅近くにある森林の事例を1カ所挙げて、植生の紹介文を400～1200字にまとめる。

*参考例：茂原市鶴枝には、国指定の天然記念物であるヒメハルゼミの生息する極相林があります。神社やお寺に隣接する鎮守の森は数百年以上にわたり人間が手を付けずに残した自然が点在していました。しかし近年、モータリゼーションの影響による駐車場の増加、開発行為によって急激に自然林は減少しています。鶴枝の森は少なくなった自然林の一つで、高木相の優占種は高さが15m直径が60cm以上になる照葉樹の高木であるスダジイです。成熟個体の中には枯死した倒木もありますが、ギャップには次の世代の若木や別種のアラカシも認められます。さらに、ヒメハルゼミの生息地を荒らさぬように獣道ほどの道を歩きながら林床を観察すると、優占種はオオアリドオシという棘のある小さな低木で、他にオモト、ヤブラン、リョウメンシダ、イチヤクソウ、フユツタ、マンリョウ、ベニシダが認められ草本層を形成していました。それより少し高い、ヒトの背丈ほどの低木層にはアオキ、トベラ、ヒイラギ、ヤツデ、ヒサカキが目立ち、10m程度の亜高木層には、カクレミノ、ヒメユズリハ、カゴノキ、リンボク等が認められました。この森は小高い標高20m～40m程の鞍部になっていますが、周囲は縄文海進（約6000年前の海面上昇時）には海であった10m程の平野部で、境界部分は昔の海食崖がきりたっています。この斜面に多いのがマダケやヤダケ、アズマネザサ等の竹笹類です。フジやツルグミ等の絡みつき植物もその内側に目立ちます。極相林の北部にはマダケが優占する竹林があり、地域の方々が南下して増殖するのを抑えているとのこと。また、南西部の公民館に隣接する崖付近にはコナラが生育していることから極相以前に生態攪乱を受けた場所だと推定されます。ヒメハルゼミは文化財保護法により法的に守る義務が市役所に求められていますが、茂原市のハザードマップによると、崖が危険地区に指定され、災害対策基本法により公民館は避難場所として使えなくなったそうです。地域の方々からすると近くに避難場所が欲しいというニーズがありますし、自然保護の観点からすると崖をコンクリートで工事するわけにもいかない。さて、どうやって合意形成をはかたらよいのでしょうか。なお、この森の西部には八幡湖という淡水湖があり、姫春の里という名称で観光開発された公園がありますが、民間企業に事業委託という形態で、市では、現在、入札対応中とのこと。聞くところによると、グランピング等のアウトドアレジャーの計画をしている企業が手を挙げているとのことですが、コロナ渦の中、観光業の景気が不透明で費用対効果が読めない状況の様子です。市役所や文化財審議の委員の立場からすると、客観的なデータを提供する事が求められていると思われ、ヒメハルゼミの個体数変動と森の状況の把握や崖の保全との関わり、土砂崩れの危険度の評価の為の崖の地層や岩石組成の調査などが有効ではないでしょうか。更に、鶴枝小学校の児童が観察活動を継続している教材でもあるので、そのサポートを市の生涯学習課、公民館活動やその展示物を通し実践できれば幸いです。